

うづちなどもてありく物などにも、猶かならずとらすべし。
〔枕草子四〕さぶらひのおさなるものゆのはのごとくなるとのゐぎぬの袖のうへにあをきかみの松につけたるををきて、わな、きいでたり。そはいづこのぞととへば、齋院よりといふに、ふとめでたくおぼえてとりて參りぬ。○中御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌ふたつを、うづゑのさまにかしらつ、みなどして、山たちばな、ひかけ、山すげなど、うつくしげにかざりて、御文はなし、たゞなるやうあらんやはとて御らんすれば、うづちのかしらつ、みたるちひさきかみに、

山とよむをの、ひゞきをたづねればいはひのつゑのおとにぞありける、御返しかせ給ふほどもいとめでたし。

〔枕草子七〕正月十日そらいとくらふ、雲もあつく見えながら、さすがに日はいとけざやかにてりたるに、ゑせもの、家のうしろ、あらばたけなどいふもの、つちもうるはしうなをからぬにも、もの木わかだちて、いとゑもとがちにさしいでたる、かたつかたはあをく、いまかた枝はこくつかみはうるはしきがのぼりたれば、又こうばいのきぬ白きなどひきはたへたるをのこ、はうくははきたる、木のもとにたちて、われによき木きりていでなどこふに、又かみおかしげなるわらはべの、あこめどもほころびがちにて、はかまはなへたれど、色などよき、うちきたる、三四人うづちの木のよからんきりておろせ、こゝにめすぞなどいひて、おろしたれば、はしりがひ、とりわき、われにおほくなどいふこそおかしけれ。

〔源氏物語浮舟〕正月の一日すぎたる比わたり給て、わか君のとしまさり給へるを、もてあそびうつくしみ繪、ひるつかた、ちいさきわらは、みどりのうすやうなるつ、み文の、おほきやかなる